

日本語と言語類型

児玉徳美

1. 日本語は<話し手の主観、イマ・ココ>を軸とする言語か

本稿をまとめようと思いついたのは、日本語の特徴として主張される本節の表題への疑問からである。そのきっかけは、かつて『言語』(2006年5月号、大修館書店)で論じられた「「いま」と「ここ」の言語学——ことばの主観性をめぐって」の特集、最近では澤田(2011a)による『主観性と主体性』、さらには広瀬(2011)によるもので日本語は聞き手の伝達意図より話し手の思いだけを言語化する私的表現中心の言語であるとする考察などである。その多くは日本語が<話し手の主観、イマ・ココ>を軸とする言語であると主張している。

私の直感では<話し手の主観、イマ・ココ>を表す典型的な言語表現は英語の法助動詞と呼ばれる can (could), may (might), must などである。英語の法助動詞はたとえ過去形に用いられても話し手の現在の心的態度を示す。それに対応する日本語の「～できる、～かもしれない、～でなければならない」などがしばしば「法助動詞」と呼ばれるが、英語の法助動詞とは中身が異なる。現在時制の場合、日英語とも能力・可能性・義務などについて現在の話し手の心的態度を示しているが、日本語の法助動詞は過去形の場合、「～できた、～かもしれなかった、～でなければならなかった」などは過去の事態について言及しており、話し手の現在の心的態度とは無関係である。英語の法助動詞のように<話し手の主観、イマ・ココ>にのみ用いられる日本語「法助動詞」は「～だろう」(推量)、「～(よ)う」(推量・意志・勧誘)の一部に限られる。

法助動詞は話し手の心的態度を示すが、話し手に限らず、人が心で思っていることを示す述語は内的状態述語または私的述語 (private predicate) と呼ばれる。人が心で思うことは「本人」のみが意識するもので、その心中は他者にはわからず、外からうかがうだけである。したがって内的状態述語はその主語が話し手本人であるか、2・3人称の他者であるかによって表現形式が変わることがある。2・3人称の主語についてその心中を外から断定できない場合、確定的な断言の形をとる直接形でなく、表現を和らげるため述語の不確定な判断を示す間接形が付加される(直接形と間接形の規定について詳しくは神尾1990:16参照)。ただし外からうかがえる証拠がある場合は、1人称主語と同じように断定の直接形が用いられる。どのような文脈で間接形を用いるかは言語によって異なる。

- (1) a. ボクは淋しい。 vs I feel lonely.
 b. * 太郎は淋しい。 vs (?) Taroo feels lonely.
 c. 太郎は淋しそうだ。 vs Taroo looks lonely.
 d. ボクは / (?) 太郎は淋しかった。 vs I / Taroo felt lonely.
- (2) a. ボクは花子が正直だと思う。 vs I think that Hanako is honest.
 b. * 太郎は花子が正直だと思う。 vs Taroo thinks that Hanako is honest.

- c. ボクは／太郎は花子が正直だと思った。vs I / Taroo thought Hanako was honest.
 d. 太郎は花子が正直だと思っている。vs Taroo thinks that Hanako is honest.
- (3) a. あなたは私たちについてもっと多くのことを知りたいのでしょうね。
 b. You would like to find more about us.
 c. Vous désirez miew nous connaître. ——神尾 (1990:254)
- (4) a. 花子さんは君の妹ですか。／花子さんは君の妹です* (ね)。
 b. Is Hanako your sister? / Hanako is your sister, * (isn't she?)

(1) - (3) の下線部は内的状態述語と間接形を示す。(1) の内的状態述語(淋しい、feel lonely)は(1c)のように「～そうだ」や looks の間接形を加えると適格になる。(1) (2) からうかがえるように、一般に英語のほうが日本語より断定の直接形を用いる場合が多い。日本語でも(1d) (2c, d)はそれぞれ(1b) (2b)より適格な表現となる。これは過去形接辞「～た」やアスペクト接辞「～ている」が内的状態述語の証拠をつかんでいることを示唆し、一種の間接形の機能を果しているためである。(3)は日本語・英語・フランス語を比較したものであるが、これだけから判断すると、直接形を用いる範囲はフランス語が最も広く、英語がこれに次ぎ、日本語がもっとも狭く、間接形を付加する場合が一番多いことになる。英語の内的状態述語の主語は人称による変化を受けないとよくいわれるが、現実には必ずしもそうっていない。(1a, b)では人称による違いがあり、(3b)で would を削除して直接形にした場合、(3a)の意味にならない。間接形は語るだけの証拠が話し手にないときに用いられるもので、証拠の有無による表現の違いは内的状態述語に限らず、あらゆる表現にみられる。(4a, b)の日英語で確証がない場合は疑問文で質問し、証拠が少ない場合は断定の直接形は不適格で()内の下線部が必要になる。「ね」形や付加疑問(tag question)は(1d) (2c, d)の時制辞やアスペクト辞と同じように、証拠不足を補正する間接形の機能を果している。主観性を論じる際、しばしば(1) - (3)の内的状態述語が議論されるが、こうした述語は(4)と同様に<話し手の主観、イマ・ココ>よりも情報のなわ張りや証拠性と関連するように思える。

(1) - (4)で表される事態は、正確にはそれを体験したり、それに直接関係する本人にしかわからないため、主語の人称が制限を受けたり、述語に間接形やそれに類する接辞や語句が付加される。間接形などの付加の仕方は言語によって異なり、話し手の意思で自由に変えられるものではない。それと対照的に、法助動詞は能力・可能性・許可などのいずれで表すかは話し手自身の判断に任されることが多い。法助動詞のように話し手の心的態度を示すものに敬語表現や敬意表現がある。

確かに敬語表現は一種のモダリティ表現といえる。

- (5) a. 社長が客を迎えた。
 b. 社長がお客様をお迎えなさいました。

(5b)は(5a)と同じ命題内容を伝えるものであるが、話し手が誰に向かって話しているかによって(5a) (5b)の使用が違ってくる。また敬語表現は、話し手にとって人間関係に配慮した、心的態度を表すため、(5b)のような過去の事態でも臨場的・体験的に把握されており、主観性ととも<イマ・ココ>の視点がみられるとよくいわれる。

しかし、ここには人間関係はみられるが、臨場性や直接体験は認められない。(5b)は話し手が敬

語の対象である社長を直接知らなくて、その社員に報告する場合にも可能である。ここでの人間関係は「話し手と敬語の対象」とともに「話し手と聞き手」の二重の関係を指している。前者の話し手と敬語の対象との関係は聞き手も承知しており、社会で受容されている地位や年齢がかかわる人間関係であり、後者の聞き手との関係は話し手が誰に向かって話すのかにより話し方が異なり、大人が幼児に向かって I, you に代えて多様な自称詞・対称詞を使うのと同質の人間関係である。例えば敬語の対象である自分の父を聞き手が身内の者であれば「お父さん」、外の者であれば「父」と呼ぶように、日本語は話し手にとって聞き手が内か外かで区別する相対的敬語であり、幼児に対しても聞き手が内か外かで区別する多様な自称詞・対称詞をもつ。これに対して韓国語は聞き手が内か外かで区別しない絶対的敬語であり、幼児に対しても自称詞・対称詞は日本語ほど豊富ではない。この点、日本語は韓国語以上に聞き手に配慮している。誰が敬語の対象であるかや聞き手が話し手の内・外のいずれに属するかの人間関係は、話し手が発話場面に応じて主体的に判断するものではなく、話し手が既存の社会的通念に従って選ぶ言語化であり、かなり他律的なものである。敬語表現にみられる二重の人間関係は法助動詞と同様に話し手の心的態度を表すとはいえ、その言語化には臨場的・体験的な判断はなく、話し手の意思よりむしろ社会的要素が強く関係している。

人が言語をつくるように言語が人をつくり、人が文化をつくと同じように文化が人をつくる。人を介して言語と文化は無関係ではない。ここにも日本語・日本文化の特徴として<話し手の主観、イマ・ココ>の視点は見えてこない。日本文化はクダクダしく語ることを野暮とみなし、空気を読む察しの文化ともいわれる。その結果、あいまいさを特徴とする「言説の秩序」を生んでいる。また控え目の文化で自分の主張を展開するより全体の和を尊ぶともいわれる。そのような状況をふまえて井出(2006)は日本語を対象に『わきまへの語用論』を顕している。「わきまえ」とは人が社会で生きていく上で求められる適切な行動をとるための社会の基準とすることができる。日本語に特徴的な敬語表現もわきまえから生まれたという。日本語が英語やフランス語より内的状態述語に敏感に反応するのも、他者の心の内に侵入することに慎重で、各人のなわ張りを守り、確かな証拠のあることを表現する「わきまえ」から生まれたともいえる。察しの文化や控え目の文化はあいまいな言説の秩序やわきまへの表現と密接につながっている。ここには<話し手の主観、イマ・ココ>の臨場性とあまりかかわりがなく、むしろその対極にある社会や事態全体への気配りがうかがえる。

認知言語学は発話に先立って事態把握をする「認知の主体」に焦点を当て、言語表現は人間の認知能力や認知過程に基づいて形成されるという。したがってどのような表現も人間の主観的な事態把握の反映であるとみなされる。例えば日の出という現象は地球が(太陽の周囲を公転しながら)自転することから生まれる。しかし「太陽が東に昇る」という認知像は人間の主観的な思い込みであり、認知過程で万人にそのように「錯覚」されており、「太陽の上昇」も客観的な事実とみなされる。とはいえ、言語表現の主観性や客観性は認知像を共有する人数の多寡によって左右されるわけではない。言語の特徴を示す指標として主観・客観をどのように区別するか、あるいは区別する意義があるのか否かを問う必要がある。

主観・客観はある意味で便利な用語である。「主観的な問題」であるとか「客観的な事実」といわれると、もっともらしい落ち着きを与えてくれる。主観・客観の区別は実体(すなわち事物の本質)があるか否かとも似ている。物理的に目にし耳にすることのできるモノは「太陽の上昇」の事態把握と同じように、そこに実体があるとみて安心する。しかしその実体は表面的なものでその内面は見かけと異なるかもしれない。物理的に知覚できずイメージで形成される心象は主観的に事態把握さ

れ、不安定でしばしば個人によって異なる。吉本隆明や B. アンダーソンのいう「言語共同体の幻想」もその一種である。しかしその共同幻想が強固なものになると、共同体の意志や行動をも支配する。例えば「国家・国民」という共同幻想が、過去 2 世紀にみられるように、深い同士の愛を呼び起こし、数百万人の人々が殺し合ったり、あるいは自ら進んで死んでいくことにもなる。この状況は今も続いている。

EU (欧州連合) は EEC (欧州経済共同体) として発足した 1958 年以降、戦争をなくすため欧州の経済統合を目指し、現在は加盟 27 ヶ国 (そのうち 17 カ国が「ユーロ」を導入) に拡大している。どのように事態を把握し、何を実体とみなすかは究極的には価値観とも関係してくる。EU 拡大の背後には従来の「国」の枠組みを超え、未来に向けての新しい世界が構想され、欧州の経済統合という理念が強固なイメージを形成する上で役立っている。しかし 2011 年に、ギリシャの国家財政破綻をきっかけに加盟国に動揺が起こり、2011 年 12 月現在 EU 基本条約の見直しが始まっている。例えば英国では EU 離脱論が噴出し、さらに国内で自然エネルギーに恵まれているスコットランドでは英国からの独立運動も起こっている。国家統合・旧来の国家への復帰・国家の分裂など、さまざまな欲望が渦巻いている。今や人間の欲望や行動を突き動かしている実体は金の力かもしれない。しかし金や貨幣に価値があり、そこに実体があると信じるのも 1 つの思い込みであり幻想である。金や貨幣の存在価値が未来永劫に続くわけではない。EU の理念も 20 世紀後期のグローバリズムの波の下で生まれた。しかし国家の枠を超えるグローバル経済の大波に呑み込まれた結果、新たな経済格差により拡大した多くの貧困層が苦しんでおり、グローバリズムという共同幻想も今や見直しされようとしている。

共同幻想や実体は物理的に知覚できず、それを形成するイメージが人々を結びつけたり離反させているかにみえるが、その基底にあるものは価値観である。もちろん価値観も変化していく。価値観の変化こそが歴史をつくっていく。幻想や実体やイメージを構成する諸要素のうち何に価値を見出しているかを探ることが重要である。人文社会科学が分析したり最終目標とするものは、本来、目に見える具象名詞ではなく、正義・平和・豊かさ・美などの抽象名詞で表されるものである。その対象や目標に対して、どんな人文社会科学も専門領域において価値観と関連する安定した解決策を示したものはない。言語学を含め、政治学・法学・経済学・歴史学においても同様である。

日本語の特徴が〈話し手の主観、イマ・ココ〉にあるという主張も、強固な幻想や実体になりそうにない。ここには大きく 2 つの問題がある。第 1 に日本語の特徴として収斂するには大まかすぎ、第 2 に日本語のどのような現象がその主張を支えるかが疑問である。第 1 の問題点についてはこれまで論じられている言語類型の中で日本語がどのような位置にあるかを確認する必要があり、第 2 の問題点については日本語の特徴を他の視点から説明できるか否かを検証する必要がある。第 1・第 2 の問題はそれぞれ 2 節・3 節で論じる。言語は生き物と同じく歴史的にも個人・社会によっても変化していく。個別の現象が孤立して存在するわけではなく、それぞれつながりのうえに成り立っており、諸言語は固有の方略をもち、諸言語の変化や特徴を支配しているともみられる。このような言語の動態をみたとき、言語表現のうち何をどのように分析するかが問われてくる。言語の方略、言語分析の対象と方法はそれぞれ 4 節・5 節で考察する。

2. 言語類型

世界に存在する言語の数は8千とも6千ともいわれている。諸言語の歴史的変化を通時的に辿り、類縁関係に基づく関係が言語の系統であり、諸言語の特徴を共時的に分析し、類似関係に基づく分類が言語類型である。個別言語の特徴はどの言語類型に属するかによりその位置づけが明らかになる。

言語類型で分析対象とされる言語構造は音声・形態・統語・意味などに関係する。例えば語を形成する音声構造としては、日本語がピッチアクセント、英語が強勢アクセント、中国語が声調 (tone) の類型群に分かれ、そのほか音素配列・母音や子音の数などにも類型がみられる。本節は主に音声以外の言語構造を対象にし、これまで分類されてきた言語類型の中で日本語の位置づけを明らかにするとともに、言語類型の問題点や今後の課題を考察する。

これまで多くの言語類型が提案されている。

(6) 言語類型	日本語	英語	中国語
a. 屈折 [孤立・膠着] 言語	膠着	孤立	孤立
b. 階層型言語 (か非階層型言語か)	-	+	±
c. VO 言語 (か OV 言語か)	-	+	±
d. 主要部前置 (か主要部後置か)	-	+	±
e. 題目優先 (か主語優先か)	±	-	±
f. 対格言語 (か能格言語か)	+	+	+
g. スル型言語 (かナル型言語か)	-	+	+
h. 動詞フレーム言語 (衛星フレーム言語か)	+	-	-
i. 話し手志向型言語 (か聞き手志向型言語か)	-	+	±
j. 語用論型言語 (か統語論型言語か)	+	-	+
k. I モード言語 (か D モード言語か)	+	-	±

上記の表のうち (6a) は形態、(6b-d) は語順、(6e-h) は構文、(6i-k) は文生成の視点を中心に分類したものである。左側の類型は (6a) のみが3つに分類され、他はすべて () 内の類型とともに2値的に分類されている。右側の日本語・英語・中国語欄の [+] は左側の () のない類型を有し、[-] はその類型を有さず、[±] は () のない類型と () 内の両方の類型を有することを示す。上記の表で [±] が多いことは類型化が容易でないことを示している。また [+] や [-] に限定している場合も多くの例外を含んでおり、(6) はあくまでも大まかな類型化である。例えば (6a) は19世紀に盛んに論じられた古典的類型であるが、どの言語も多かれ少なかれ、3種の言語特徴を有しているため今日ではあまり用いられない。英語についていえば、かつてはラテン語や現代のドイツ語やフランス語などとともに屈折言語に属していたが、今日では名詞の格変化が消失し、動詞の時制変化のほかに代名詞の格変化や形容詞の比較変化にわずかに名残りをとどめている。その結果、英語は文法的関係がしばしば語順によって示され、中国語と同じ孤立言語に属するとはいえ、屈折言語の特徴を中国語より多く有していることになる。他方、文法的関係を示す要素として英語が前置詞をもつものに対して中国語は前置詞も後置詞ももつ点、中国語は英語より膠着言語の特徴を多

く有するともいえる。

(6b-k)において諸言語を2つに分類する基準(指標)を簡単に説明する。(6b)の(非)階層型言語はVP(動詞句)の有無、語順が固定しているか否か、諸要素が統語的に連続しているか否かなどが基準になる。(6c)では動詞(V)が目的語(O)に前置するか後置するかの違いで(6d)の類型と連動し、VO言語は主要部前置型で前置詞をもち、OV型言語は主要部後置型で後置詞をもつことを含意している。(6e)は文の基本構造として題目を有するか主語を有するかの違いである。(6f)の対格言語は自動詞文であれ他動詞文であれ、主語が主格を、他動詞文の目的語が目的格(対格)をとり、能格言語は自動詞文の主語と他動詞文の目的語が無標の絶対格をとり、他動詞文の主語が有標の能格をとる。(6g)の指標は話し手の主体や<動作主>を中心とするか、主体の意図的な働きより事態状況を中心とするかで異なり、(6f)の対格言語・能格言語の類型とも関連している。(6h)の指標は移動や経路を表すのに動詞を用いるか衛星の副詞や前[後]置詞句によるかである。(6i)の指標は人間があらゆる行動で「最小労力の原則」に従っていることと関連する。言語表現において話し手志向型言語での話し手はできるだけ話す労力を儉約するため必要以上の情報を与えることを控え、少数の語句で用を足したり1語に多くの語義をもたせているのに対して、聞き手志向型言語は聞き手が解釈する労力を儉約して理解しやすいように話す(詳しくは後ほど5節で考察する)。日本語が聞き手志向型言語であることはそれだけではない。日本語が敬語、自称詞・対称詞、終助詞、内的状態述語と結合する間接形などに詳しいことは、聞き手や周囲への配慮が厚いことの反映といえる。(6j, k)はそれぞれ多くの特徴を含むので、次の(7)(8)でその特徴を紹介する。

(6a-i)の言語類型が1つまたは比較的少数の特徴を基準に、それを有するか否かを問うているのに対して、(6j, k)は下記の(7)(8)に示すように、かなり多くの特徴を基準にしている((7)(8)について詳しくはそれぞれ見玉 2010:150-152、中村 2004 参照)。

(7)	語用論型言語	統語型言語
a. 題目か主語か	題目(・主語)優先	主語優先
b. 接続	ゆるやかな並列	厳密な従属
c. 話し方	ゆっくり	速い
d. 既知情報の省略	多い	少ない
e. 語順	情報の新旧などによる	意味上の格機能を合図
f. 動詞	単純; 名詞と1対1	複雑; 多様な名詞と結合
g. 文法形式	単純	複雑
h. 焦点の新情報	顕著な抑揚や強勢	ほぼ同じ抑揚
(8)	Iモード	Dモード
a. 人称代名詞	多様	一定
b. 主観述語	あり	なし
c. 擬声語・擬態語	多い	少ない
d. 直接・間接話法	ほぼ直接話法のみ	間接話法も発達
e. 主体移動表現	通行可能経路のみ	通行不可能経路も可
f. 過去時物語中の現在時制	多い	まれ

g. 間接受身	あり	なし
h. 与格か間接目的語か	与格 (利害の与格)	間接目的語 (受け手)
i. 題目か主語か	題目優先	主語優先
j. R / T か tr/lm か	R/T	tr/lm
k. 非人称構文	あり	なし
l. 代名詞省略	多い	まれ
m. 終り志向性	なし	あり
n. アスペクト	始まり志向	終り志向
o. 動詞 vs 衛星枠付け	動詞枠付け	衛星枠付け
p. 中間構文	直接経験表現	特性記述表現

(7) の語用論型言語が文脈情報を含む意味に敏感であるのに対して、統語型言語は言語形式を重視している。(8) の I モード言語は認知主体の話し手と客体となる対象が区別なく融合している言語であるのに対して、D モード言語は太陽の上昇のように、認知過程で捉えられる現象を認知主体の話し手があたかも外から客観的に眺めるような視点をとる言語である。(8) の類型化は認知言語学でしばしば用いられ、I モードと D モードは人によってはそれぞれ主観的—客観的、状況中心的一人物中心的、直接的一外置的と呼ばれることもある。(7) (8) の左側に示した言語特徴について若干補足説明しておく。(7b) の「接続」は節と節の結合をいう。(8b) の「主観述語」とは「～したい、寒い」などのように、主語が 1 人称の認知主体にのみ用いられ、他の人称では表現が異なるものである。(8e) の「主体移動表現」とは状況描写がそのまま認知主体の移動を含意するものをいう。例えば「道路 [* 電線] が海岸に沿って走っている。vs The road [The wire] runs along the coast.」において I モードの日本語では主語である「道路」と「電線」の適格性が異なるのは、主語が認知主体の移動可能な経路であるか否かによる。(8j) は事態や参加者が何を中心に表現されるかを示し、R/T は Reference-point (参照点) / Target (標的)、tr/lm は trajector (トラジェクター) / landmark (ランドマーク) の略である。(8m) の「終り志向」は事態の捉え方を示すもので、(8n) のアスペクトの一部である。

本節の冒頭で述べたように、言語類型と言語の系統は異なる分類である。例えばフランス語は同じインド・ヨーロッパ語族に属しても、(6h) や (8o) において衛星フレーム言語の英語やドイツ語と違って動詞フレーム言語であり、イタリア語は (7d) や (8l) において他のインドヨーロッパ語と違って主語が誰であるかわかっているときは省略でき、It is raining. のように天気をあらわす文では主語がなくてもよい。言語が歴史的に変化する過程で同じ系統内でも違いが生まれる。言語の変化には系統によるより隣接する地域により影響を受けることもある。(7) の語用論型言語がアジアやアフリカの言語に多く、統語型言語がヨーロッパに多いのもそのためである。

言語類型が大まかな分類であることは、これまで何度も述べてきた。(7a) において語用論型言語は題目優先としたが、フィリピンのタガログ語は節が常に題目を有する題目言語であるのに対して、日本語と中国語は (6e) で同じ [±] が付与され、節によっては題目を用いたり、主語述語構造をとったり、その両方を併用したりする。しかし日本語と中国語では何を題目とするかに違いもみられる(詳しくは兎玉 1991 参照)。また日本語は (6f) で英語などと同じ対格言語とみなしたが、「太郎は英語がわかる／英語が得意だ／金が要る」などの状態述語ではガ格の目的語をとり、能格言語の

特徴も時にみられる。日本語は部分的に能格言語の特徴を有することにより、英語と違ってナル型言語 (6g) になじみやすいといえる。

言語類型には例外が含まれるため、1つの類型で多くの言語現象を説明しようとするほど例外が多くなる。したがって (8) は (7) より多くの特徴に言及しており、例外が多いのも当然であるが、問題はそれだけではない。例えば中国語をとりあげてみよう。中国語は (8l) の代名詞省略が D モードの英語より多いが、I モードの日本語より少ない。(8o) においては英語と同じ衛星枠付けに属するが、(8m) において英語の動詞は「終り志向」が強く、動詞が行為とともに行為の結果達成も含意し、*I burned it, but it didn't burn. といえないが、日本語は「始まり志向」で行為の結果を含意せず「燃やしたが燃えなかった」が可能であるのに対して、中国語動詞の「買」「殺」は日本語以上に「始まり志向」が強い(詳しくは児玉 1991:92 参照)。1つの言語が I モードと D モードの両方の特徴を有することになり、(8) は言語類型として必ずしも成功していない。そのことは I モードと D モードを構成する諸特徴が基準として疑わしいことにもなる。(8) の言語類型は 1 節の表題ともかかわるため、その問題点については次節以降でも扱う。

言語類型が少数の言語構造を対象にする場合でも、類型間の関係が説明できるならば言語タイプの価値はいっそう増してくる。(6c) と (6d) が相互に連動しているのもその 1 例である。M.C.Baker (2001) は生成文法の枠組みを利用し、類型の階層化を最も徹底している。そこでは類型を構成する基準として 11 個のパラメータを用いて英語・スペイン語・日本語など 13 種類の文法を導いている。2 値的なパラメータに主語配置、空主語、主語卓越、能格性、主要部方向性、多総合性などが階層をなしている。しかしこの階層化も成功しているとはいえない。その原因は 1 つの類型基準である言語構造やパラメータの下で一括して多くの言語を扱おうとすればどうしても反例が出てくるためである。これは言語類型としてやむをえないのかもしれない。しかし Baker (2001) の階層化での最大の問題点は反例を原則の適用外として無視していることである。例えば主要部方向性のパラメータにおいて例外のない主要部後置の言語である日本語と対照的に、英語は主要部前置の言語であるとみなされるが、主要部の動詞に従属する主語、名詞に従属する冠詞や形容詞などは主要部方向性パラメータに違反することになる。このように多くの反例を無視した場合、必然的にその類型化は荒けずりなものとなる。

今後の類型論研究として 3 つの課題が残されている。第 1 の課題は類型の基準である言語構造を明示的なものにするることである。例えば何を階層型言語の基準とするかは必ずしも明確でない。(6b) において英語は階層型言語、日本語は非階層型言語に入れているが、人によっては日本語も階層型言語の特徴を有すると主張している。また主要部方向性との関連で英語を分析対象とする生成文法学者の中には冠詞や *this, these* などの決定詞 (determiner) を主要部とし、それに後置する名詞に従属部とみなし、この結合を決定詞句 (D-phrase) と呼ぶ者もある。しかし世界には冠詞などもたない言語も多くあり、この分析は言語普遍的な名詞句との共通性を見失っている。決定詞句という範疇は主要部前置の英語の語順に無理に整合させようとする英語中心主義のひとりよがりの基準といえる。

第 2 の課題は言語類型と歴史的変化の関係である。言語は歴史的に単純な言語形態から複雑な言語へ発達するとの考え、あるいは子どもから大人のことばへの変化やピジンからクレオールへの変化との類推から、孤立言語から膠着言語へ、そして屈折言語へと発展したり、SOV 言語から SVO 言語へ、題目優先言語から主語優先言語へ、語用論型言語から統語型言語へ移行変化すると主張す

る者がある。これもインド・ヨーロッパ語族中心に考えられたものである。言語類型の歴史的変化が複雑化、あるいは単純化の一方へ向かう必然性があるとは考えられない。例えば中国語は古くから孤立語で今も変わらない。日本語は中国語から多くの語彙や漢字を借入したが、文構造において主要部後置の語順原則を厳守する点では何の変化もない。歴史的変化に複雑化や単純化の一方へ向けての必然性がないとすれば、どのような要因が変化を誘導するのかが問題となる。この点については4節で考察する。

第3の課題は言語類型と言説の関係である。これまでに扱った言語類型はほとんどが文内の構造を対象とするものであった。諸言語の真の姿に接するには文を超える言説をも対象にし、諸言語の「言説の秩序」にも届くものでなければならない。そこでは言語表現と社会・文化の関係も問われることになる（詳しくは児玉 2010:153-154 参照）。

3. 日本語の特徴

3.1. 主観性・主体性とは何か

日本語は話し手の主体と客体の対象が一体となり、状況内に視点を置く状況密着型であるのに対して、英語は主客を対置して客体の状況の外に主体を置くことが多い。この視点の違いについて私も異論はない。問題は認知言語学が前者の日本語の視点をIモードで主観的、後者の英語の視点をDモードで客観的と呼ぶことにある。ここでは主体・客体と主観・客観をまるで等式で結んでいる観がある。

小阪 (2011) は『西田哲学の基層』と題して1920年代後半以降の後期の西田哲学と西洋の近代哲学を(9)のように対比している。

(9) a. 西田はデカルトから始まりカントによって完成された近代西洋の哲学を一括して「主観主義」と呼び、また「対象論理」とも呼んでいる。それは、主観と客観、自己と世界という二元的対立の図式でもって物を考え、また世界を自己の外にある対象として、自己の側から見ていこうとするものである。したがって、それは自己を基準として世界を見ようとするのであるから主観主義であり、また世界を自己の外に自己に対してある対象と考えるのであるから対象論理と呼ばれる。これに対して、西田自身は、自己と世界を、両者の相互対立の図式から考えるのではなく、むしろ両者の相即的ないしは相補的な関係から考えようとしている。

——小阪 (2011:15—16)

b. 此等の人々（西洋哲学）と私（西田）との根本的立場の相違は、自己から世界を考えるか、世界から自己を考えるかにあるのである。…私の立場は、主観主義とか個人主義とかと言うものとは、正反対の立場である。

——小阪 (2011:16)

(9) には認知言語学の視点との関係で2つの主張がみられる。1つは自己と世界の捉え方(9a)であり、あと1つは何を主観・客観と呼ぶか(9a, b)である。まず第1の主張からみていく。近代西洋の哲学は自己と世界を対立するものとして捉え、世界は自己の外にあり、自己を基準に世界を見るのに対して、西田(1820—1945)自身は自己と世界が相互に対立するものではなく、両者が「相即的」

な関係にある、つまり2つのものが区別なく溶け合っているという。西田哲学と西洋哲学の違いは、日本語が状況密着型で英語が主客を対置し、主体を客体の外に置くという認知言語学の視点と基本的に変わらない、西田哲学の主張は、その後、日本と西洋の言説や文化が議論される際、両者の違いの底流にある。

- (10) 西洋人の場合は、意識が無意識と明確に区別された存在として、その中心に確立された自我を持っている。しかしながら、人間の心は意識も無意識も含めた全体としての中心、自己を無意識に持っており、それと自我がいかにかわりを持つかが大切なことである、とユングは主張する。…日本人の場合は、意識と無意識の境界が鮮明ではなく、意識も中心としての自我によって統合されていない。西洋人の目から見れば、それはしばしば日本人の主体性の無さや無責任性として非難される。しかし、日本人はむしろ、心の全体としての自己の存在に西洋人よりはよく気づいており、その意識は無意識の一点、自己へと収斂される形態を持っているのではなかろうか。つまり、意識と無意識の境界も不鮮明なままで、漠然とした全体性を志向しているのである。——河合 (1999:96—97)

河合によると、西洋人は意識と無意識を明確に区別し、意識の中心に確立された自我をもって外の世界を見るのに対して、日本人は意識と無意識の境界が不鮮明で主体性のなさにもつながる自我の弱さがある。ただし、日本人の場合、その代償として漠然とではあるが、外の世界の全体性への志向がみられるという。西田や河合のような全体性重視の考えは清水 (2000) や井出 (2009) などで提唱されている「場の理論」にもつながる。ここでは人間から対象を切り離すのではなく、すべての存在について自他不分離の下で話し手も対象物も存在する場、またはコンテクストの内側の視点から事態把握をしようとしている (詳しくは兎玉 2010:162 参照)。(9a) と (10) あるいは「場の理論」の主張はほぼ似た立場にあり、私もそれに異論はない。全体性を志向する過程では事態の存在そのものに焦点があり、事態を構成する諸要素の区別立てやその事態に至った原因や責任は二義的なものとなる。

問題は (9a, b) の第2の主張で何を主観・客観と呼ぶかである。西田によると、西洋哲学は自己と世界を対置させ、自己を基準として世界を見ようとするもので主観主義であるが、西田自身の立場は世界から自己を見ようとするもので客観主義であるという。この主張は日本語のIモードを主観的、英語のDモードを客観的という認知言語学の呼び方と逆である。ここに主観・客観の混乱の根源があり、用語としてのあいまいさがある。西田は西洋哲学が自己を基準に世界を見るか、世界から自己を見るかにより主観主義・客観主義といい、認知言語学はIモードは認知主体の話し手と客体の対象が区別なく融合しているため主観的で、Dモードは話し手が客体の対象の外に出て認知過程で客体の認知像を眺めるままに描いているので客観的という。河合 (1999) は慎重に主観・客観という用語を避けている。「場の理論」は話し手を含む内側から事態を把握するものであり、人間から対象を切り離し、客観的にコンテクストを含む事態を把握する認識論と異なると主張しており、主観・客観の用法は認知言語学と同じである。

西田と認知言語学は世界を捉える際、自己〔主体〕と世界〔客体〕が合一の関係にあるか分離の関係にあるかという点で、大きく2つの視点があることではほぼ一致しているのに、なぜ主観・客観の用法が異なるのであろうか。西田は視点の基準が自己も融合している世界にあるか世界から分

離した自己にあるかで客観か主観かを分け、認知言語学は自己と世界が融合しているか分離しているかで主観か客観かを分けている。要するに、ほぼ同じ視点を取りながら両者は重点の置き方が異なり、真逆の用語を用いている。両者は同じ客観という用語を用いる理由として、一方は自己と不可分に融合している世界から自己を捉えるためであるとし、他方は認知主体である自己が自己から分離した客体として世界を捉えるためであるとしている。しかし自己と世界の融合や分離はそれほど簡単に割り切ることができるのであろうか。

そのことは片岡 (1997:175-176) からもうかがえる。片岡によると、一方で英語は客観的で実証的な性能をもった事実と則した言語であるとしながら、他方では事実を観察するにはさまざまな視点が成立し、事実は一定でなく多様であるとしている。話し手 [主体] があってはじめて世界 [客体] が存在し、逆に客体があつてはじめて主体が存在し、両者が融合しているか分離しているかは程度の問題であり、話し手が世界を描く際の主観・客観の境界は限りなく不透明である。主観・客観という用語は不可避的にあいまいさを有している。

話し手が眺めるまま、思いのままを描いているといっても、その内容への認知過程・意識・確信度・証拠性に違いがあり、その違いは主客融合・主客分離や主観・客観の違いによるものではない。例えば *Mary is tall [beautiful, kind, (?) lonely]*. という場合、形容詞が示すものは話し手の判断であり、話し手自身その判断について認知過程・意識・確信度・証拠性には違いがあることを知っている。したがって「太陽が昇る」と (1)-(3) で扱った「淋しい、思う、したい」などの内的状態述語は認知過程や証拠性などに違いがあることは十分承知しており、「太陽が東に昇る」が諸言語で類似の形式で表現されるのに対して、判断に確信や証拠性に乏しい内的状態述語が言語によって異なる形式で表現されるのは不思議でない。言語分析として重要なことは、主観・客観よりむしろ話し手の認知過程や証拠性などについての判断の中身であり、直接語られる話し手を含めた対象 (部分) と言外のコンテクストを含めた事象全体の関係である。

日本語が主観性を軸とする言語であるという主張では、その典型的なものとして主客合一が挙げられる。つまり物語であれば話し手 (作者) と主人公が融合する場合である。その具体例としてしばしば川端康成の『雪国』の冒頭部分が引き合いに出される。

- (11) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落とした。雪の冷気が流れこんだ。
- b. The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop. A girl who had been sitting on the other side of the car came over and opened the window in front of Shimamura. The snowy cold poured in. —E.G.Seidensticker (訳)

池上 (2006, 2011) によると、(10a) の日本語では語り手は汽車に乗って移動している島村の主人公に同化している。汽車の中の主人公が自らの体験を語るという構図で汽車そのものは視野に入らず、作者は主人公と一体化して言語化されない。これに対して (10b) の英語訳は語り手が汽車の外に身を置いて、トンネルから出てくる主人公を乗せた汽車を客体として捉えるという構図であり、*The train came....* という冒頭の文は自分の方へ向かってくる汽車を外から眺めている。『雪国』は英語

のほかにドイツ語・フランス語にも訳されており、(10a)と同じ<主観的把握>による訳もあるが、(10b)と同じ<客観的把握>により「汽車」が訳されているものもあるという。熊倉(2006, 2011)も池上とほぼ同じ立場である。熊倉によると、最初の3つの文は汽車の中にいる人が次々と立ち現れる現象を観察し報告しているように読める。ところが次の文章で「島村の前の…」という文言からは、島村とは別の語り手が同じ汽車に乗っていて、島村や「娘」を認識していると読まなければならない。しかしその語り手がどこにも姿を見せないで「島村」という3人称のスタンスがいかがわしく、「島村」の存在が宙ぶらりんになってしまうという。

確かに日本語は主客が合体して話し手を含む事態全体を視野に入れ、視点の揺れがみられる。話し手・登場人物・全知全能者のいずれの視点か、あるいはその一部が合体したものか判然としないまま、描写されることがある。これは主観性の問題というより話し手の視点のあいまいさである。話し手が明確に言語化されないでその視点のあいまいな背後には、(9)(10)でみた全体性への志向があり、河合(1999)のいう自我の弱さ(10)があるのかもしれない。しかし主客の合体や視点の揺れはそれほど頻繁に起こるわけではない。話し手が明示されないからといって、話し手の存在が判断できないことにはならない。

(12) a. 太郎はボクに事故の責任があると言った。

b. Taroo said that he / I was responsible for the accident.

(13) a. 太郎はボクに事故の責任があると信じている。

b. Taroo believes that I am [*he is] responsible for the accident.

——以上2例は広瀬(2011)

(12a)は主節動詞が伝達動詞の「言った」であるため、(8d)の言語類型から<ボクに責任がある>が直接話法とも解釈され、「ボク」は「太郎」と「話し手」の両方をも指してあいまいであり、英語に訳すと(12b)のように2通りの解釈が生まれる。ただし(13a)は主節動詞が内的状態述語の一種である思考動詞の「信じている」であるため<ボクに事故の責任がある>を直接話法と解釈することが不可能であり、「ボク」は話し手のみを指す。

日本語で明示されない話し手と他者の区別を可能にしている要因は、日本語が事態に焦点を当てるナル型言語(6g)や既知情報を省略する語用論型言語(6j)に属し、あるいは話し手・聞き手・第三者のいずれに向けてのものかを示す敬語・終助詞・内的状態述語・なわ張り(くれるーやる／こ・そ・あ)などの表現が豊かで自他の区別に敏感なことにある。

認知言語学の問題点は、日本語の特徴を論ずる際、話し手の主体や主観性を強調するあまり、主客合一の表現にとどまらず、多くの日本語の特徴を主観性によって説明することにある。主観性を拡大解釈することで主観性そのものあいまいになってくる。むしろ日本語や諸言語の他の現象と併せて説明する必要がある。

(14) a. ここはどこですか。

b. Where am I?

c. 現在地 (You are here.)

(15) a. (電話のやりとりで) 上原さん、いますか。——私です。

b. Can I talk to Mr.Uehara?—This is he.

c. 上原さん、いますか。——いますよ。今ママと話しているよ。それでどうしたの。

池上 (2006) は (14a) の日本語は自己中心的に自らを原点として<ゼロ化>した表現になっているが、(14b) の英語は話し手が客体化された<客観的把握>になっているという。しかしこれは所在の表現の仕方が人中心か場所中心かの違いにすぎない。日本語は人称代名詞や「人」が一般的に英語と違って場所を示すことができない。そこで「人称代名詞や人がいる場所」を表現する場合、英語は例えば *He ran to her.* といえるが、日本語は「彼は彼女* (のところ) へ走って行った」となり、() 内の場所を示す語句を補う必要がある。また日本語には自称詞・対称詞を含め多様な人称 (代) 名詞があり、それぞれが話し手・聞き手・第三者との関係について異なる含意をもつため、そのような含意をもたない場所指示詞の「ここ (こちら)、そこ (そちら)、あそこ (あちら)」がしばしば1・2・3 人称の人称代名詞に代わって用いられる。(14a, b) の違いはそのような事情によるものであり、主観的・客観的把握と無縁である。その証拠に案内板などでは (14c) のように現在の所在が日本語では場所、英語では人で示される。上原 (2011) は (15a, b) では客体化されているはずの話し手が「私」と *he* で人称が異なり、その違いは主観・客観のいずれを重視するかによるという。しかしこれも日英語には主観・客観より代名詞用法の違いや語用論型か統語型かの言語類型の反映にすぎない。日本語では代名詞の使用が避けられ、(15a) の返事の主語は「私」ではなく「上原さん」であり、主語が語用論的に省略されているにすぎない。そのことは (15c) からうかがえる。(15c) は子どもが問いの本来の意味を理解できず、問いを文字通りの意味に解釈して答えているが、「います」の主語は (15a) と同じく「上原さん」であり、(15a) と同様に日本語代名詞使用の原則に従って言語化する必要がないだけである。英語における (15b) の *he* は統語型言語として *Mr. Uehara* を受ける代名詞使用の原則に従ったものにすぎない。

認知言語学では日本語は主観的に事態を把握し、話し手の意識のままに省略が多く客観的な時間軸も無視する自己中心的な言語であり、その解釈を聞き手／読み手の責任に帰しており、その代償として日本語の対話で豊富な終助詞がそうした自己中心性を補正し、やっとなコミュニケーションを成立させているともいわれる (池上 2006、熊倉 2006 参照)。しかしこうした主張は英語中心に言語を分析した感想にすぎない。英語だけの視点から日本語や他言語を見たとき、言語の姿を見誤る。

日本語に省略が多いことはすでに論じたように語用論型言語に属するためであり、時制は英語に比べて一貫性がないが、時間軸や時間感覚は存在する。むしろ時制を時間軸と直結させるべきではない (これについて詳しくは 3.2 節で考察する)。また日本語が話し手志向の言語で自己中心的であるという主張は言語類型上 (6i) に反する。(6i) で示したように、日本語は聞き手や周囲への配慮が厚く対象依存性の強い言語である。対象依存性が強いのは河合のいう自我の弱さ (10) とも関連している。日本語での省略は話し手のひとりよがりの省略ではなく、(15) でみたように、語用論型言語の原則 (7d) に従って文脈上の既知情報が省略される。むしろひとりよがりの省略は英語の高次表意にみられる。高次表意とは既知情報の省略というより、話し手志向型言語 (6i) として話し手が自らの意図について必要最小限の情報を与えるだけで、聞き手にとって必要な詳しい情報を伝える労を省略し、その解釈を聞き手の推論にゆだねるものである。

(16) a. He's coming toward us.

- b. (i) こっちへ来るよ。 (告知)
 (ii) こっちへ来るぞ。 (警告)
 (iii) こっちへ来るね。 (確認)
 (iv) こっちへ来るさ。 (予想)
 (v) こっちへ来るわよ。 (女性の告知)

——内田 (2002)

(17) a. Frankly, I can't help you.

b. 率直に* (言って、) 手伝えません。

(18) a. John has left, in case you haven't heard.

a'. 聞いていないので* (言いますが)、ジョンは出ていきました。

b. Why is Paul leaving, since you know so much?

b'. 君は何でも知っているのだから* (聞くのだけれど)、どうしてポールは出ていったの。

c. If that's John, I am not here.

c'. もしジョンだったら、私はいない* (と言ってね)。

——内田 (2011)

(16a) の英語は日本語では (16b) のように多様に訳され、終助詞が () 内の言語行為を明示している。終助詞は自己中心性を補正し、日本語の主観性という「罪」ほろぼしをするどころか、話し手のあいまいな意図を明確にする機能を果している。そのことは先に (4a) でもみた通りであり、その機能は英語でも形式は異なるが (4b) のような形で果されることがある。問題はコミュニケーションにおいて話し手の意図が明示されないときに起こる。(17a) の **Frankly** は文副詞として **Frankly speaking** の意味で命題に対する話し手の態度を含意しているが、日本語で命題態度を示すためには () 内の「言って」を補う必要がある。(18a-c) においても同様で節間の関係を日本語で明示するには () 内の語句が必要になる。英語では話し手の意図を (17) の副詞語句や (18) の節間の関係に委ね、聞き手にその解釈を推論させている。同じことが文間の関係についても、つなぎの意味を聞き手に推論させることが多い。聞き手に多くの労力を強いる点で英語は話し手志向の強い言語 (6i) といえる。上記 (16)-(18) の英語において話し手の意図は明示されていないが、関連性理論は話し手の命題態度や発話行為を「高次表意」(higher-level explicature) と呼んでいる。明示されない話し手の意図を「表意」と呼ぶことにより「表意」と「推意 (implicature)」の違いをあいまいにしている。そのこと自体は理論上の用語の問題であるにしても、やっかいなことに、高次表意の命題態度や発話行為が明示されるか否かが諸言語によって異なる。言語分析としては、間接形を追加するか否かと同じく、命題態度や発話行為を言語化するか否かの理由について諸言語の異同を明らかにすることこそ求められる。言語化するか否かは主観—客観の区別によって説明できそうにない。

諸言語はそれぞれ固有の特質を有しており、同じ言語類型に属しても、その中身が違ってくる。日本語は英語と同じ対格言語に属するが、英語と違って、話し手に限らず動作主が常に優先されるわけではない。動作主が明確な場合でも、例えば結婚案内状に「結婚します」としないで「結婚することになりました」と書いたり、「法律が決まった」「お茶が入りました」などの表現が可能である。これは日本語がナル型言語 (6g) であり、対格言語とはいえ、前に述べたように能格言語の特質を部分的に有し、動作主より<対象>や事態を重視することがあるためである。(9b) の西田に言わせ

ると、こうした事態重視の視点は日本語が「世界から自己を考える」ことに由来する。同じアジアの言語でも内的状態述語の形式と主語の人称制限において中国語は英語に、韓国語は日本語に近い。また同じ語用論型言語に属するが、ゼロ代名詞主語で日本語や韓国語は「好きだ／愛している」が可能であるが、中国語では「我愛你」と代名詞が義務的であり、ここでも英語に近い（上原 2011 参照）。しかし中国語は前に論じたように、明示的な時制をもたず、(8m)において動詞が行為の結果を含意することが少ない点では、日本語や韓国語以上に英語から遠い位置にある。

主観—客観の境界が不透明で危ういとすれば、その使用や用語に注意する必要がある。Traugott (1989, 1995) は意味変化の1つのタイプとして主観化 (subjectification) を挙げている。主観化とは語彙や構文が常用されているうちに新しい意味を獲得する際、非主観的な命題の意味が主観的な態度や信念状態を表す意味へ移行し、さらに話し手の主観的な意味を聞き手と共有しようとする間主観性 (intersubjectivity) へ発展するという。Traugott は文法化と結びつけて主観化を論じ、その例として繰り上げ構文の *be going to*、法助動詞の *must, may*、談話標識の *well, in fact*、遂行動詞の挿入的用法 (*I promise you, you lie*) などの意味用法の変化を扱っている（詳しくは澤田 2011b、秋元 2011 参照）。しかしここで扱われている主観化の項目には法助動詞・談話標識・接続詞・挿入節など雑多なものが含まれ、相互に密接な関係はない。英語の個別の語句や構文が新しい意味を獲得した跡を辿ったものにすぎず、他の言語に適用できるものではない。一般的な意味変化の原理としては主観化より意味の希薄化とするほうが適切である。その証拠に「主観化」のもとで扱われる語句は一律に文の命題から除外されるものである。主観化が不適切であるのは、個別言語の意味獲得過程と普遍的な意味解釈能力を混同したことから生じている。前者の意味獲得過程が特定語句の意味を獲得する過程で多様な可能性の中からその一部を恣意的に選ぶものであるのに対して、後者の意味解釈能力は未知の語句の意味を解釈する普遍的な能力である。両者の違いについて詳しくは兎玉 (2012) を参照されたい。

主観化と逆の現象として脱主観化 (desubjectification) あるいは脱主体化と呼ばれるものがある。これは歴史的な意味変化というより、(8) の D モードの視点をいう。つまり認知主体が対象と不可分に融合している状況密着型の I モードの外に出て、例えば太陽の上昇のように、元来主観的である認知像をあたかも客観的に眺めるような視点をとることである。その代表例としては (1)-(3) で考察した内的状態述語がある。話し手には対象の心的状態がわからないのに、英語やフランス語のように間接形を用いなくて直接形で表現する場合である。この場合、直接形でさえ客観的事実のように描写しても、その証拠が示されなければ、聞き手にとっては話し手の主観的な判断に変わりがない。話し手の判断とはいえ、「太陽の上昇」と内的状態述語では条件が異なる。「太陽の上昇」は万人がそのようにみるのに対して、内的状態述語は個人や言語、あるいは文脈によって判断や表現法が異なる。話し手が *He is lonely.* と客観的に描写しても聞き手がそう判断できない場合、聞き手は話し手が独断的で人の心がわからないとみなす。I モードの日本語でも物語などで主人公について「太郎は淋しい」と描くことは可能である。これは話し手（つまり作者）が物語の中でその証拠を挙げ、聞き手や読み手を主人公の「太郎」と同化させようとする場合である。前にも触れたように、「太陽の上昇」と内的状態述語などの間には証拠性のうえて大きな隔りがある。それを同じ「脱主観化」で一括するのは乱暴すぎ、「脱主観化」の使用には厳密さが求められる。また内的状態述語の (1)-(3) が脱主観化の代表例であるとするれば、英語やフランス語は日本語と違って間接形に頼らないで直接形を用いることが多く、脱主観化の表現が多いことになる。しかし脱主観化は元来主観的

である認知像をさも客観的に眺めるような視点をとっており、(11a) で批判された日本語の特徴とされる主客合一と似てくる。脱主観化と主客合一にどのような異同があるかについても今後明らかにする必要がある。

最後に「間主観性」にも苦言を呈しておく。間主観性を表す表現としては(4) (16b) で扱った付加疑問や日本語の終助詞「よ、ね」などが含まれる。間主観性は複数の対話者、あるいは話し手と聞き手がいっしょに同じものに注意を向けることで共同注意 (joint attention) と呼ばれることもある。共同注意は幼児の認知発達や言語発達に貢献するにしても、大人の言語活動についていえば、独り言はともかく、すべてが注意を惹こうとするものであり、何に焦点を当てるのか、その範囲が不透明である。これも「主観性」そのものが不透明であるため 当然の帰結であろう。さらに intersubjectivity の訳語として「間主観性」が定着しつつあるが、これは「変な日本語」である。接頭辞 inter- を「間」と訳す場合は international (国家間の)、intercollegiate (大学間の) のように名詞の後につくはずである。「相互」と訳す場合、名詞の前につけて interdependent (相互依存) とすることもできる。intersubjectivity は「主観性共有」か「相互主観化」とでもなるのであろうか。訳語はともかく、intersubjectivity にとっても重要なことは言語分析としての範囲を厳密に定めることである。

3.2. <イマ・ココ>の視点

日本語が<イマ・ココ>の視点を軸にしているという主張は 3.1 節でみた日本語の<主観性>と連動している。この主張は日本語が事態を主観的に把握し、話し手が事態の中に臨場し、それを直接体験しているかのように、事態を自らの<イマ・ココ>に収斂させているという。確かに日本語は(9) (10) の後で論じたように、話し手がコンテクストを含む事態の中にあり、事態世界の内側から事態を把握している。この視点は話し手が事態世界の外から事態を見る英語の視点と対照的である。その結果、熊倉 (2006) が指摘するように、<今は山中、今は浜、今は鉄橋渡るぞと、…>では、車窓から次々と更新される<イマ・ココ>の世界が話し手の感性が捉えるまま描かれ、日本語の時間は話し手の<イマ>しかない。これとは対照的に英語は発話時 (<イマ>) を基点に時間差が時制によって示される。そこで日本語の「ボクが生まれる前」は英語では過去時制となる。またモダリティの一種で主観性とかかわる敬語も話し手の<イマ・ココ>の心的態度を表しているといわれる。たとえ過去の事態について敬語を用いても発話時の<イマ・ココ>で話し手が敬語の対象に対してもつ心象が表されているためである。

上記の主張には主として3つの論点が含まれる。第1は日本語は事態を話し手の<イマ・ココ>の心象に委ね、時間の推移に鈍感なことである。第2は時間感覚と時制の関係であり、第3は敬語との関係である。

まず第1の論点からみてみよう。熊倉 (2006) が指摘するように、<今は山中、…>では車窓に映る事態が次々と更新される。しかしこの事態は話し手の<イマ、ココ>の心象を無造作に連ねているわけではない。事態の推移は時間の経過を反映しており、時間順序を明確に意識している。例えば『雪国』の冒頭に現れる名詞は、(11a) でみたように、「国境の長いトンネル→雪国→夜の底→信号所→汽車→向側の座席→娘→島村→ガラスの窓→夜の冷氣」の順となっている。主人公 (と融合した話し手) が汽車の中で目にする事態の推移は時間の経過に従っている。統語型言語に属する (11b) の英語ではこの順序を守ることはできない。

第2の論点の時間感覚と時制の関係に移ろう。日本語に時間感覚が欠如していないことはすでに述べた。問題は時制との関係にある。確かに日本語の時制にあいまいな場合がある。過去のことを現在時制で語る場合がしばしばある。一方、英語の時制は<イマ>を基点に過去とその前の過去、それに未来が明示される。

- (19) a. 太郎は朝7時に起き、8時に学校へ行き、授業を受けて5時に帰った。
 b. Taroo got up at seven in the morning, went to school at eight, had classes and came back at five in the evening.
- (20) a. 太郎は毎朝宿題をする前に朝食をとる。
 b. 太郎は毎朝宿題をした後に朝食をとる。

(19a) では動詞が連なり、前の動詞を連用形にし、最後の主動詞だけが時制を合図している。連用形は動詞の事態の推移を示すため、主動詞から判断してその前の過去の事態となる。一方、(19b) の英語では動詞はすべて過去形で示されている。日本語で時制を混乱させる1つの要因に「タ」が時制の過去とともに完了を表すことにある。(20a, b) では従節に現れる動詞が「前」と「後」の前で異なる形式をとっているが、(20b) での「タ」は時制でなくアスペクトを表している。このあいまいさが外国語を習得する際、しばしば誤用の原因にもなっている。

- (21) a. 私が5歳の時、父が死んだ。
 b. *When I am five, my father died.
- (22) a. Before I came to Japan, I went to China for a trip.
 b.* 日本に来た前に、中国に旅行に行きました。

(21b) は日本語母語話者が英語で作文するときしばしばまちがう例であり、(22b) は英語母語話者が日本語で作文するときの誤用例である（そのほか類似の誤用例については潘・小沢 2006 参照）。いずれの誤用も母語干渉による。

母語の時制が外国語習得の際、障害になることがあるにしても、時制を客観的な時間軸に直結させることはまちがいである。日本語では文末尾の主節動詞の時制・語順・文脈によって客観的な時間軸は解釈される。時制を時間軸に直結させた場合、時制をもたない中国語では時間感覚が欠如し、時間軸が明示されないことになる。時間軸は動詞だけでなく、それと共起する副詞語句や文脈などから示唆される。中国語では語順が日本語や英語以上に時間軸に敏感に反応することは兎玉 (2012) を参照されたい。

日本語は時制にあいまいさがあるのと対照的に、英語は発話時の<イマ>を基点に動詞は主節と同じように従節も時制の一致の原則に従い、過去・現在・未来を明示する。それだけではない。学校文法で直接話法から間接話法への転換で示されるように、ダイクシス（直示表現）に敏感で代名詞や副詞語句も発話時の時間<イマ>・場所<ココ>の基点に則してふるまう。その結果、(12) でみたように代名詞が日本語であいまいであるが、英語ではあいまいさが消えている。日本語よりむしろ英語こそ<イマ・ココ>を軸に表現するといえる。

最後の第3の論点である敬語との関係について考えてみよう。敬語が一種のモダリティであるこ

とに異論はない。しかし (5) で述べたように、心的態度を表すとはいえ、敬語は法助動詞のような話し手の主体的な判断とは基本的に次元が異なる。したがって、法助動詞などと違って話し手が誰に向かって対象〔客体〕を語るかによって語り方が (5a, b) のように違って来る。その判断は話し手の主体的な意思というより、聞き手にも配慮した社会的通念を表現したものである。敬語をもたない母語話者が日本語の敬語に苦勞するのもそのためである。ここには話し手・聞き手・対象の三者の関係と同時に話し手・聞き手の年齢・性・上下関係などが微妙にからんでくる（これは敬語に限らず、(6i) でみた自称詞・対称詞にもうかがえる。日本語の豊富な自称詞・対称詞はそれぞれ含意が異なり、その含意の違いは話し手と聞き手との関係によって規定される。詳しくは兎玉 2010:193—194 参照）。確かに敬語の対象に出会ったのがたとえ過去であっても、対象への判断がしばしば話し手の〈イマ・ココ〉に引き継がれる。しかし引き継がれている判断は〈話し手の主観〉ではなく、むしろ社会的通念であり、その場の参与者によって敬語の使用は (5a, b) のように変わる。

3 節は日本語が〈話し手の主観、イマ・ココ〉を軸とする言語であるとする見解に疑問を呈してきた。主観・客観という用語は危うい概念であり、文法範疇に混乱を招く。主観性と連動した〈イマ・ココ〉も同様にあいまいな概念である。言語分析としては〈話し手の主観、イマ・ココ〉に代えて言語類型を含む他の言語特徴を基準にすべきというのが 3 節の結論である。

4. 言語の方略

言語はゆっくりとではあるが変化していく。言語を一定の方向に向けて駆り立てる、目に見えない力が働いている。その力は地理・政治・経済・宗教などの地理的・社会的条件に由来する。変化の速度は言語によって異なる。例えば同じゲルマン語派でも英語はドイツ語よりも速く変化している。同じ言語においても地域による方言が標準語より先に進むこともあれば、遅れて古い形式を残すこともある。もちろん変化の方向も言語によって異なる。しかし 20 世紀末より IT (情報工学) が発達し、世界が小さくなり、諸言語の変化は時代の強い影響を受け、互いに相似た方向へ進むとも考えられる。諸言語は不動のものではなく生物のように変化しているが、生物が環境に影響されながらも、自らの生得性や意思が変化の方向を選択するように、諸言語も地理的・社会的条件に影響されながらも、独自に変化の方向を選んでいる。つまり、一方で他から一定の方向に駆り立てられながらも、他方で自らを一定の方向に駆り立てている。本節の表題では言語変化や言語の特質がすべて他力によるものでなく、言語が自ら一定の方向を選んでいる意味を込めて「言語の方略 (strategy)」とした。本節では日本語の変化や構造の底流にどのような力が働いているかを探りたい。

かつて Sapir (1921) はその著書の第 7 章を「歴史的産物としての言語：駆流」(Language as a Historical Product : Drift) と題して言語の変化を考察している。駆流とは言語が目に見えない力で徐々に一定の方向に流れていくことを指している。Sapir はその著書の中で言語・文化・人種についても考察し、三者の間には基本的に何の関係もないという。言語と文化についていえば、何の縁もない異なる言語が 1 つの文化を共有したり、逆に同じ言語を共有しながら異なる文化圏に属することがあるためである。ただし言語と「思考の溝」(thought-groove) の間には密接な関係があるという。

- (23) a. The writer, for one, is strong of the opinion that the feeling entertained by so many that they can think, or even reason, without language is an illusion. (言語がなくとも思考することができ、推論さえできると多くの人が感じているが、それは幻想にすぎないという考えが筆者としては強い。) —Sapir (1921:15)
- b. Language and our thought-grooves are inextricably interrelated, are, in a sense, one and the same. (言語と思考の溝は解きほぐせないほど絡み合っており、ある意味でまったく同じものである。) —Sapir (1921:217-218)

(23a) では人間は言語があっただけで思考したり推論することができるのみならず、(23b) では単なる「思考」といわず、「思考の溝」といっている。「思考の溝」とは「習慣的な思考 (法)」または「定型化された思考法」と解釈される。Sapir の死後 20 年以上過ぎて D.G.Mandelbaum によって編集された Sapir (1961) では言語が文化・社会の産物であることを強調しており、言語学が人間研究にとって不可欠のものであることを示唆している。Sapir の主張は弟子の Whorf の主張と併せて「サピア・ウオーフの仮説」、あるいは「言語相対性」とも呼ばれる。この仮説は言語と文化の影響関係には慎重であるが、言語と習慣的な思考の間には密接な関係を認めている。

Sapir (1921, 1961) 自身、文化を明確に規定せず、言語と文化の関係にはあいまいなところがある。問題は習慣的な思考 (法) と文化の間にはどのような違いがあるのかということになる。文化は生活・行動様式から思考様式に至る人間の多様なふるまいを示し、もともとあいまいな用語である。今日では Foucault (1971) 後、思考・文化と言語をつなぐものとして「言説の秩序」(order of discourse) という概念が形成されている。「言説」とは個人によって発せられるが、その言語表現は、話されるものであれ書かれるものであれ、歴史的に社会集団や社会的関係によって統御され規定され、その時代のあらゆる種類の社会制度や価値観や「常識」と結びついている。「秩序」とは「整然とした状態」を指すのではなく、歴史的に社会によって形成される言説のスタイルや様式である (詳しくは見玉 2008: 17-26 参照)。私は習慣的な思考法が、言説の秩序に影響を与えることで言語や文化の基本的方向を支えており、言語や文化の重要な一部をなすと考える。

独断になることを恐れるが、私は日本文化の特徴を次のように考える。日本文化は察しの文化や全体性・コンテクストへの配慮を基本とする。結果的に全体の和や調和を重視する中で、一方で敬語や「恩、義理、わきまえ、常識」など多くの日本語が英語に訳しにくい他者との関係を含意し、他方では言動が主体性や責任感の欠如をもたらしたり強い対象依存性が「甘えの構造」さえ生むことになる。このような文化の特徴は伝統的な宗教からの影響も受け、言語観において依言真如より離言真如のほうが深いという思考法と結合し、あいまいさを特徴とする言説の秩序を生んでいる。例えば他者のふるまいや社会の不正に対して陰では不平不満の声は大きいですが、他者との違いや争いを恐れて表立った告発や対案提言の声は小さい。責任の所在があいまいな中で変化が先送りされ、同じ状況が続くことになる。こうしてあいまいな言説が循環する。

日本語を生み出している多様な要因のうち究極的な要素としては (9) (10) が挙げられる。西田と河合の考えは抽象的であるが、そこには西洋と対照的に、全体性を志向する中で自己を含む世界から事態全体を見ようとする眼差しがうかがえる。しかしその眼差しから生まれた言語表現や言説の秩序がよいか否かは別問題である。その評価は価値観とも関連する。私としては (10) の末尾で日本人が「意識と無意識の境界も不鮮明なままで、漠然とした全体性を志向している」という河合

の考えに異論はない。しかし、あいまいさを称揚し、「21世紀の世界を解く鍵は「あいまいさ」にある」とする河合の主張には賛成しかねる（詳しくは児玉（2006：103—108, 2010：161参照）。これは私個人の意見である。今後、もし日本語の表現法や言説の秩序への批判が高まるとしたら、どのように変えるかが課題になる。変化の方向は習慣的な思考法ともかわり、まさに「日本語の方略」が試される。将来の方向は本稿の枠を超えるので、ここでは指摘にとどめる。

5. 分析対象と分析方法のあり方

3.2節の末尾では日本語の分析として〈話し手の主観、イマ・ココ〉に代えて言語類型を含む他の言語特質に注目すべきとした。しかし現実には分析対象の領域やレベルによって分析方法も違っている。2節で論じた多様な言語類型も何に焦点を当てるかの違いを反映している。その点、従来の言語類型は文内の言語構造、あるいはせいぜい隣接する2・3の文を対象に分析したものにすぎない。日本語に限らず言語の全体像を知るためには、できるだけ多くの言語を考察するだけでなく、できるだけ広い領域やレベルを対象にする必要がある。全体は部分からなるが、全体は単に部分の積み重ねではない。いくつかの部分が構成する領域やレベルは、またいくつかの階層をなしており、上の階層は下の階層にない特質や機能を有している。言語分析としてはその対象を言説にまで拡大する必要がある。そうしてはじめて言語分析をするうえで必要な道具立てがそろい、適正な分析結果を得ることができる。

20世紀の言語分析はSaussureとChomskyの2度の「言語革命」を経て、ラングや言語能力としての文を生成する言語の仕組みを究明してきた。21世紀の言語分析は20世紀に蓄積した文内の言語構造を前提に、パロールや言語運用として具体的に表現される言語活動のしくみを究明する時である。最終的には言語表現を介して言語を使う人間の正体に迫り、人文社会科学の基礎を提供すべきであろう。

分析対象を言説にまで拡大した場合、当然、それに見合う分析法が求められる。言説を分析することにより、あるいは諸言語の言説の秩序を比較考量することにより、言語と社会・文化の関係を介して言外の文脈情報を問い、言説の妥当性を判断することにもなろう。分析対象を拡大することによりこれまでの言語分析で気づかれなかったことが明らかになる。例えば「主観性」や「主体性」を議論するにしても、文のみを対象にするか言説をも対象にするかによってその内容は大きく異なる（「主観性」の違いについては児玉 2011a, b、「主体性」の違いについては児玉（準備中）参照）。話し手の意図や主張も言説や言説の秩序の中ではじめてその真意が明らかになる。

たとえ分析を言説にまで拡大しても、言説で表現されていることのみを対象にしたのでは不十分である。言説において何を語り何を語りたくないかは、話し手個人の主体的な問題とはいえ、人は語りたくないことだけを語り、語りたくないことに沈黙する性癖がある。語りたくないことを語らず、やりたくないことをやらず、聞きたくないことを聞かない不作為（negligence）の言動にも注目する必要がある。行動に移さない不作為は本人が気づかないときもあるが、しばしば故意に何も手を施さないことがある。「不作為の作為」は「沈黙の陰謀」（conspiracy of silence）とも呼ばれる。言語分析は「不作為の作為」を含めてなされるべきである。

具体的な分析方法として、これまで私は全体から細部（部分）に至るトップ・ダウン式分析と細部

(部分) から全体に向かうボトム・アップ式分析を統合することを提案してきた。人間の言動を誘引する人間の生得的な能力・文化・価値観などとかかわる一般的な原理から出発して、そこから派生する下位階層の具体的な言語表現を説明するとともに、逆に具体的な言語表現から出発して上位階層との関係を調べる。ある階層に属する領域はその上位階層に対しては部分であり、その下位階層に対しては全体となる。各階層をなす領域がその上位階層と下位階層との関係で齟齬がなくなった段階で言語分析は終了する（詳しくは児玉 2008, 2010 参照）。

トップダウン式分析とボトム・アップ式分析を統合するといっても、階層をなす領域によって上位階層と下位階層が異なり、つまり領域やレベルによってその全体と部分の関係が異なり、両分析の統合は必ずしも容易ではない。ここでは2つの現象を例に具体的にその分析方法を示す。いずれもこれまで扱った主観性に関するものである。

第1は言語類型上日本語が(6i)の話し手志向型言語か聞き手志向型言語かの問題である。認知言語学は日本語が話し手の主観・意識を軸とする言語で話し手志向型言語に属するのであるが、本稿は(6i)で示した言語特徴から、英語が話し手志向型言語に属し、日本語は聞き手志向型言語に属するとみる。

Sapir (1921) はすべての言語には、本来、表現の経済性をめざす志向性があり、もしこの志向性がなければ文法というもの存在しないであろうと述べている。経済性とは「最小労力」と言い換えることができる。言語の基底にはこの経済性原理が働いているとみていた（詳しくは加藤 2004 参照）。その後 Zipf (1949) は経済性原理を拡大して人間のあらゆる言動に「最小労力の原則」が貫いているとした。最小労力の原則は、言語表現に適用すると、話し手と聞き手の側で反対に働いている。Grice (1975) の語用論では4つの公理の1つである「量の公理」が「必要なだけの情報を与えよ」と「必要以上の情報を与えるな」の2つに下位区分されており、一見矛盾した公理に見えるが、前者が聞き手の論理で、後者が話し手の論理である（詳しくは児玉 2010: 177 参照）。前者が日本語型で後者が英語型となる。(6i) でみたように、日本語は聞き手の労力を少なくするために、聞き手に「必要なだけの情報を与えよ」、1語の語義も少ないのに対して、英語は話し手の労力を少なくするために、「必要以上の情報を与えず」、1語に日本語の10倍以上もの語義がある。さらに日本語が聞き手志向の言語であることは(16)-(18)での英語の高次表意を日本語が言語化していることからもうかがえる。(6i) で示した日本語の特徴を含め、いずれも聞き手に配慮して多くの語を費やしているが、英語はそのような表現に欠如したり、簡単な表現ですましたり、断定的な表現をとり、意味解釈の負担を聞き手に負わせている。このような英語は話し手が自らの労力を節約して生まれたものである。

第2の現象は日本文化の特徴とみなされる「ウチとソト」の区別が言語にどのように反映するかである。日本文化は和を尊び、全体性・コンテキストへの配慮を1つの基本的視点とするが、結果的には先ほどの聞き手志向とも関連して周囲や対象に敏感に反応し、対象依存度やコンテキスト依存度の高い文化といえる。例えば契約の概念や慣行が日米で異なるといわれる。一般に米国では個人を重視し、社会に対する信頼度が低く、ことば以外のコンテキストに依存する度合いが低いいため、契約の締結方法や契約不履行の処理方法が形式上厳格になる。これと対照的に日本では集団を重視し、社会に対する信頼度が高く、コンテキスト依存度が高いため、契約が形式上厳格でなく、書面も交さないことがある（詳しくは児玉 1998: 183 参照）。対象依存性の高い文化は(6i)の聞き手志向型言語や(7)の語用論型言語とも結合しやすく、〈われわれ意識〉とともに〈ウチ〉と〈ソト〉を

区別するなわ張り意識が強くなり、〈ウチ〉に対しては連帯感や「甘えの構造」が生まれ、〈ソト〉に対しては敬語や内的状態述語に敏感になる。(5) でみたように日本語が相対的敬語であるのも、絶対的敬語である韓国語以上に聞き手が〈ウチ〉と〈ソト〉のなわ張りのいずれに属するかに敏感なためである。なわ張り意識の最も典型的な表現としては英語の *give* に対して日本語は「やる—くれる」となる。〈やる—くれる〉は単に *give* に対応するだけではない。「～してやる [くれる]」のように多くの動詞の連用形に「テ」を添えて補助動詞としても用いられる。日本語の話し手のなわ張りは (1)-(3) でみたように英語より狭いが、話し手の中に話し手だけでなく、〈ウチ〉として話し手の親族も含むことがある。敬語の対象となる人の親族も同じように扱われる。

(24) a. 私はあなたに息子がすぐに出て行くことを約束する。

b. *I promise you that my son will leave soon.

(25) a. ? 私の妻はピアノが弾けると思う。

b. I think that my wife can play the piano.

—— (以上 2 例、吉川 1991)

(26) a. 先生は息子さんがお亡くなりになった。

b. (?*) 先生は息子が亡くなった [死んだ]。

(27) a. * 太郎は息子さんがお亡くなりになった。

b. 太郎は息子が亡くなった [死んだ]。

(28) a. * 先生は [の] 愛犬がお亡くなりになった。

b. 先生は [の] 愛犬が亡くなった [死んだ]。

(24) (25) において日英語の適格性の違いは日本語では息子や妻が話し手のなわ張りの中にあるが、英語では話し手のなわ張りの外にあるためである (詳しくは児玉 1998: 112—113 参照)。(26) (27) において「先生」と「太郎」の間で適格性が逆になっているが、「先生」は敬語の対象となる人であり、先生の「息子さん」も先生のなわ張りの中に入るため (26b) が不適格になり、「太郎」は敬語の対象の外にあり、(27a) が不適格になる。日本語では (28a) の「愛犬」は先生の所有物として主語に用いられているが、(26a) の「息子さん」と違って敬語は用いられない。しかし敬語をもつ言語の中には (28a) に対応する文が所有者敬語として適格なものもある。所有者敬語とは敬語の対象である所有者への敬意が所有物を通して間接的に表現されることをいう。所有者敬語が所有物である身体部分・親族・愛玩動物などのどこまで及ぶかは言語によって異なる (詳しくは角田 1991: 119 参照)。なわ張り内の〈ウチ〉は所有物の一種であり、話し手となわ張り内の〈ウチ〉は諸言語間で必ずしも一致せず、文化によって異なるので注意を要する。

言語表現を分析する基準は単独で存在するものではない。上位階層と下位階層の領域が網の目のようにつながっている。各階層が互いに絡み合うことにより、各階層が安定し、構造全体が保持されていく。分析対象を言説にまで拡大するとすれば、言語と社会・文化の関係も考慮せざるをえなくなる。どのような領域を分析するにしても、その領域とそれを成立させている上位階層および下位階層の領域群との関係が問われる。上位階層の原理原則としてはできるだけ上位にあって社会・文化・言語に通じるものが望ましい。対象領域をこのように上位・下位階層の中に位置づけて諸関係の分析を積み重ねることによってはじめて言語分析は言語の全体像に迫ることができよう。

本論は主として言語分析における主観性・言語類型・社会性の問題を論じてきた。言語分析が、今後、主観性という「迷路」から抜け出るための議論では、主観性そのものではなく、その背後にある「話し手の心的態度」の中身こそ重要である。話し手の心的態度の分析には次のような課題がある。第1に、従来、文レベルや語レベルにおいて心的態度を表すといわれてきた mood (法) や modality (法性) のうち形式上 (つまり文の構成要素や語類などにおいて) 何が心的態度を表し、意味上心的態度に共通するものは何か、第2に、話し手が事態把握をする際、確定的な断言を避けて表現を和らげるため直接形に不確定な判断を示す間接形を付加することがあるが、付加するときの判断基準には証拠・信念・推測・疑問・情報のなわ張りなどがどのようにかわるのか、第3に、社会通念 (つまりポライトネス・スピーチレベル・行動様式・笑いや怒りなどの感情の表現・言説の秩序などにおける社会的な「きまり」) をどのように受容しているか、第4に、どのような価値観や信念体系を有しているか、などである。

言語分析はしばしば個別言語の英語を対象にして言語の普遍性や多様性を論じる。この傾向は英語が世界で普及していることもあり、特に Chomsky の出現後強くなっている。しかし Comrie (1981: 219) が指摘しているように、英語は言語類型上決して諸言語の典型的なモデルと呼べるものではない。(7)(8) でみたように、1つの言語類型で多くの言語特性を扱おうとすればするほど、例外が多くなる。これは言語類型研究が未成熟なためかもしれない。それだけに、言語特徴を論ずる際、英語分析から提唱される普遍性や多様性には注意を要する。個別言語の特徴が他言語との比較でどのような視点からどこに位置するかを明らかにするとともに、言語類型そのものの改善をはかる必要がある。そうしてはじめて言語の普遍性や多様性も豊かなものになろう。

言語は「主観性」や「主体性」などのように話し手個人が世界をどのように認識把握するかの観点からだけで説明されるものではない。言語は歴史的・社会的な産物でもある。人はところ構わず何事についても個人の思いを自由に語るができるわけではない。社会においてタブーもあれば、慣習上語ることをはばかれる領域もある。Foucault のいうように、何を語るかは社会によって統御され、選択されているものもあるためである。このようにみると、話し手個人の心的態度も決して社会や文化と無縁ではない。言語分析としては社会通念や価値観などへの反応も含めて話し手の心的態度を分析する必要がある。そうすることによりはじめて話し手の語りの真意に近づくことができよう。

引用文献

- 秋元実治 (2011) 「文法化と主観化」澤田治美編『主観性と主体性』93-110.
- Baker, M.C. (2001) *The Atoms of Language*, Basic Books. (郡司隆男訳 (2010) 『言語のレシピ 多様性にひそむ普遍性をもとめて』岩波現代文庫)
- Comrie, B. (1981) *Language Universals and Linguistic Typology*, Basil Blackwell.
- Foucault, M. (1971) *L'ordre du discours*, Gallimard (中村雄二郎訳 (1972) 『言語表現の秩序』河出書房).
- Grice, H.P. (1975) "Logic and Conversation", *Syntax and Semantics 13: Speech Act*, ed. by P.Cole and J. L.Morgan, 41-58, Academic Press.
- 潘鈞・井澤伊久美 (2006) 「時間認識は言葉にどう表れるか」『言語』5月号:44-51.
- 広瀬幸生 (2011) 「公的表現・私的表現と日英語の話法」『英語語法文法学会第19回大会予稿集』82-89.
- 井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館書店.
- 井出祥子 (2009) 「認識論から存在論へ：場の言語学への招待」(*Conference Handbook 27*, 210-206) (日本英語学会).

- 池上嘉彦 (2006) 「<主観的把握>とは何か」『言語』5月号：20-27.
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」澤田治美編『主観性と主体性』40-67.
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論——言語の機能的分析』大修館書店.
- 片岡義男 (1997) 『日本語の外へ』筑摩書房.
- 加藤泰彦 (2004) 「サビアの現代性」『言語』12月号：78-81.
- 河合隼雄 (1999) 『中空構造日本の深層』中公文庫.
- 児玉徳美 (1991) 『言語のしくみ——意味と形の統合』大修館書店.
- 児玉徳美 (1998) 『言語理論と言語論——ことばに埋め込まれているもの——』くろしお出版.
- 児玉徳美 (2006) 『ヒト・ことば・社会』開拓社.
- 児玉徳美 (2008) 『ことばと論理』開拓社.
- 児玉徳美 (2010) 『いまあえてことば・言語分析・言語理論のあり方を問う』開拓社.
- 児玉徳美 (2011a) 「言語分析いろいろ」『六甲英語学研究』13/14 (合併号)：1-31.
- 児玉徳美 (2011b) 「言語とは何か」『りべるたす』23：35-54.
- 児玉徳美 (2012) 「ことばと意味」『立命館文学』626：1-17.
- 児玉徳美 (準備中) 「意味分析の対象拡大に向けて」
- 小阪国継 (2011) 『西田哲学の基層——宗教的自覚の論理』岩波現代文庫.
- 熊倉千之 (2006) 「<主観>を本質とする日本文学」『言語』5月号：28-34.
- 熊倉千之 (2011) 『日本語の深層——<話者のイマ・ココ>を生きることば』筑摩書房.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」中村芳久編『認知文法論 II』3-51 大修館書店.
- Sapir, E. (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*, Harcourt Brace & World, Inc.
- Sapir, E. (1961) *Culture, Language and Personality: Selected Essays*, ed. by D.G.Mandelbaum, University of California Press.
- 澤田治美編 (2011a) 『主観性と主体性 (ひつじ意味論講座5)』ひつじ書房.
- 澤田治美 (2011b) 「第5巻『主観性と主体性』序論」澤田治美編『主観性と主体性』iii-xl.
- 清水 博編 (2000) 『場と共創』NTT出版.
- Traugott, E.C. (1989) "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change," *Language* 65:31-55.
- Traugott, E.C. (1995) "Subjectification in Grammaticalization", *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*, ed. by D.Stein and S. Wright, 31-54, Cambridge University Press.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語 言語類型論からみた日本語』くろしお出版.
- 内田聖二 (2002) 「高次表意からみた日英語比較への一視点」『人間文化研究年報』(奈良女子大学) 17:7-18.
- 内田聖二 (2011) 「メタ表現からみた引用」『英語語法文法学会第19回大会予稿集』90-97.
- 上原 聡 (2011) 「主観性に関する言語の対照と類型」澤田治美編『主観性と主体性』69-91.
- 吉川 寛 (1991) 「主語の拡大」『英語青年』6月号：125.
- Zipf, G.K. (1949) *Human Behavior and the Principle of Least Effort : An Introduction to Human Ecology*, Addison Wesley Press.

(本学名誉教授)